



未知しるべ

宇野 賀津子

「おばあちゃん、今日は化粧の専門家が来てくれてるので、お化粧してもらおうね」「はあ、化粧、わてら、いまさら」「まあ、そんなこといわず」

大阪のある老人病院で、化粧療法に取り組み始めたのは、ちょうど二年前の秋だった。大阪のある化粧品メーカーの人から、老齢期の婦人を対象に何かもっと新しい化粧の効果、精神的なことや免疫学的な影響についての研究をしたいと、相談を持ちかけられたのだ。

そのころ、心の状態が免疫機能に及ぼす影響について興味をもっていた私は、この提案に飛びつき、早速ある老人

病院のドクターにこの話を持ちかけた。

「患者さんのためになることなら、協力しますよ」。これで決まりである。

でも、化粧のプロと病院に打ち合わせに行ったとき、ベッドに横たわるおばあちゃんたちをみて、一同ため息。本当に化粧をしてもらうことができるのだろうか。

でも案するよりも産むが易し。病院の会議室に順次やってきたおばあちゃんたちに、化粧前の写真をとって、それから化粧水でふき取り、乳液、白粉、少しはお紅もさして、眉毛もカットして、口紅をひく。どれがいいかしらと差し出した口紅には、明るく

化粧の思わぬ効果

色、目立たない色、リップ口紅とあったが、一番人気のあったのは、明るい色の口紅だった。

終了後にまた写真。迎えてきた看護婦さんたちは、「いやー、見違えたわ」「いやー、〇〇さんかわいー」。おばあちゃんたちは、「はずかしいわー」といつつまんざらでもなさそうだった。

平均年齢八十三歳、車いすの人三分の二、痲痺う症状のある人三分の一という状態で、終了後一回フー。でもなんとかあと

数カ月続けられそうな気配を感じた。

さてあとは私の本来の仕事、化粧前と後の免疫機能を比較するべく採血されたおばあちゃんたちの血液検体を抱えて、一踏研究所へ。

一カ月後、二回目になると雰囲気はがらりと変わっていた。病室で待ちきれないで、会議室の前で待っている人、化粧水のフタが開けられるようになったと、不自由な片手を支えにして見せてくれる人、写真の時になるとスカーフを出してくる人。

こんな調子で四カ月間、自分で毎日、月に一回は専門家に、というこで化粧を続けられた結果、化粧前後でインターフェロンを作る能力やナチュラルキラー細胞の活性の上昇が認められた。さらにインターフェロンを作る能力は月をおうごとに上昇していた。

これらのデータは、化粧が、老齢期の婦人の免疫機能面でも改善効果があることを示しており、特に感染症に対する抵抗性をなす免疫担当細胞の能力アップが大きいことが分かった。きつと床ずれや感染症の防止に反映されるはずだ。この試みは四カ月で終わったのだが、その後化粧スタッフたちはあちこちの病院や施設で、ボランティアとして活躍している。

化粧療法は、おばあちゃんたちにリハビリ治療への前向きな姿勢、自発性、積極性、表情の豊かさ、食欲や睡眠の

改善を引き出した。一般に入院中の女性の化粧は顔色の判定ができないなどの理由により禁止されることが多いのだが、安定期にある患者さんには、化粧のこの精神に与える前向きな効果を評価し、ぜひ治療に積極的に取り入れていただきたいものだ。

この仕事をやって思ったことは、女は幾つになっても、奇麗になったといわれて悪い気はしないということだ。介護する側に、寝た切りで化粧をするなんてせいたくたという考えはないだろうか。女の本能をくすぐることは、きつと治療にもプラスになる。女は死ぬまで、枯れはしないし、枯らしてはならない。

その後の報告は、おばあちゃんたちが化粧をしたすと、おじいちゃんたちも変わり始めたことだった。

（ルイ・パストゥール医学）
（研究センター研究室長）

おばあちゃんが元気に